HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北大における文芸活動の変遷
Author(s)	神谷, 忠孝
Citation	北大百二十五年史, 論文・資料編, 241-264
Issue Date	2003-02-21
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/30004
Type	departmental bulletin paper
File Information	ronbun_p241-264.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大における文芸活動の変遷

神谷忠孝

はじめに

北大に文芸部が創設されたのは、一九二一（大正一〇）年である。この年の三月、『平原』『とどろき』『氷河』の三誌が創刊され、このうちの『平原』創刊号が『北大文芸』の創刊をかねて刊行された。『北大文芸』は一九四一（昭和一六）年一月に四一号を出して終刊している。一九二一年になって文芸活動がにわかにさかんになった背景には、一九一八年に北海道帝国大学が発足したことが大きく関係していると思われる。創設以来の戦前の北大文芸部に属した人は数多いが、『日本近代文学大事典』（講談社、一九七七年）でとりあげられている北大文芸部出身の文学者は、北大で農業経済を講じたこともある小説家の早川三代治、詩人・評論家の外山卯三郎、詩人で北大山岳部を創った伊藤秀五郎、同じく詩人の河邨文一郎といったところの名が載っている。

ここでは文芸部にこだわらず、広く文芸活動を眺めることを主眼にして資料の整理を心がけてみたい。それとい

うのも、『北大文芸』四〇号（一九四〇年十二月）に寄せた外山卯三郎の「『北大文芸』の文化的意義」の最後に、「『北大文芸』の歴史的な記録は別に機会があれば書いておきたいと思っている。その資料を文芸部も集めて措いてほしいものだ」と書いてあることが、その後文芸部も解散したという事情もあって、誰も手をつけていないからである。現在までのところ、北大の文芸活動にふれた文献として、文芸部の創設に尽力した菅原道太郎の「平原社時代の思い出」（『北海道文学』二二～二六号、一九六六年四月～六七年八月）、木原直彦著『北海道文学史―大正・昭和戦前編―』（北海道新聞社、一九七六年四月）などがある程度である。これらを参照しつつ、史的変遷をたどっておくことによって、資料的な価値をもたせたいと思う。

一　前史 (一)――『惠林』『学芸会雑誌』――

『惠林』の創刊は一八九二（明治二五）年五月である。この雑誌は一八九五（明治二八）年十二月まで一八号を出し、一九号からは、『学芸会雑誌』と改題され一九〇〇（明治三三）年十二月までに三四号を出している。『惠林』創刊号は、発行兼印刷人・小西和太郎、編集人・成田軍平、発行所は札幌農学校予科内・学芸会となっている。論説が中心の学術的な雑誌だが文芸欄もあり、創刊号を見ると、松坡小史の名で「瑞西美談・うゐるへるむ・てる」「瑞西美談・維廉・汀流」という小説のほか漢詩が載っている。一八九二年といえば、すでに坪内逍遙、二葉亭四迷などによって近代文学が進行していたころであるが、『惠林』の文芸欄にみるかぎり、新しい文学の波は北海道に及んでいない。二号の湘川漁夫「心の浮画」、五号の鼓山人「西海の嵐」などを読んでも、明治初頭の戯作小説あるいは翻訳小説の影響が顕著である。短詩型でも、詩は文語定型詩が多く、短歌、俳句も旧態を残している。

この傾向は『学芸会雑誌』に改題してからも同じであるが、きわだっているのは紀行文であり、北海道の未開地を旅しその新鮮な自然への畏敬が印象的である。『惠林』『学芸会雑誌』についてまとめれば、文芸面では新時代を反映する作品は出ていないが、紀行文においてすぐれたものが多いということ、そして紀行文にあらわれた荒々しい自然との遭遇という新鮮さが、やがて多くの人を北海道に引き寄せる要因を作っていったということである。ちなみに学芸会の会頭は新渡戸稲造、庶務幹事として小川運平、小西和太郎、佐藤庄介、編集幹事として一柳直躬、市原徳治などの名が『惠林』の四号に載っており、この中の佐藤庄介とは、初代学長を務めた佐藤昌介のことであろう。周知のように、佐藤昌介の妹佐藤輔子は島崎藤村が明治女学校で教えた生徒であるとともに恋した女性である。輔子は札幌農学校に学んでいた鹿討豊太郎という従兄の婚約者がおり、一八九五（明治二八）年五月に札幌で結婚したが、八月には二五歳の生涯を閉じている。

『学芸会雑誌』で特筆されるのは三四号（一九〇〇年十二月）に有島武郎が「人生の帰趨（独立と服従）」という論説を書いていることであり、一八九六（明治二九）年に入学し一九〇一年に卒業した有島武郎の学生時代の唯一の文章である。『学芸会雑誌』は三五号から『文武会雑誌』と改題され、三六号には「人生の帰趨」の後半が掲載されている。この『文武会雑誌』は一九〇八（明治四一）年までに五二号を出しているが、北大附属図書館にあるものでは四二号から五二号までが欠けている。

二　前史 (二) ――『文武会々報』――

『文武会々報』と改題されたのは五三号からで、このあたりから文芸欄が前面に出てきているのが特徴である。『文

武会々報』が出た一九〇八（明治四一）年は、札幌農学校が東北帝国大学の農科大学となった年であるとともに、一九〇三（明治三六）年から一九〇七年まで外国留学していた有島武郎が一九〇八年一月から英語教師として赴任している。『文武会々報』の五三号には有島武郎の「イプセン雑感」、吹田蘆風「独逸の世話物」が載っている。吹田蘆風とは一九〇七（明治四〇）年に東大独文科を卒業して有島とともに赴任した吹田順助のことでドイツ語の教師であった。この二人の出会いは北大の文芸活動に活力を与えたという意味で大きい。有島武郎の短編「半日」は吹田が有島の家に寓居していた当時のことを書いている。五四号には吹田順助「何故に吾人は悲劇を楽しむ乎」、有島武郎「米国の田園生活」「日記より」が載り、五七号から六五号まで、有島武郎のイプセンを論じた「ブランド」が連載されている。『文武会々報』が文芸面に特色を出した理由については、原田三夫の『想い出の七十年』（誠文堂新光社、一九六六年三月）の中に次のような記述がある。

> 明治四十年の十二月から、回覧雑誌「星羊」を発行した。木曽の好きであった私は桟雲というペンネームで専ら紀行文をそれに書き、ペンネーム露光の藍野は短篇小説を書いた。この雑誌は四号でつぶれたが、学校の雑誌「文武会報」を編集していた本科生の飯塚露声、本名直彦が、星羊会の同人に寄稿を求め、藍野も私も投稿して、それから「文武会報」が文学的なものになった。

『文武会々報』は一九二六（大正一五）年までに九六号を出しているが、一九二一（大正一〇）年に文芸部ができたことで九一号以後は文芸欄が消えている。有島武郎以外に目についたものをあげると、秋元喜久雄「レーナウの詩に反映せる『夜』と『死』」（五六号）、吹田順助「鳴潮録」（五九号）、新島善直「ウィッテルベルクの三時間」（六二号）、吹田順助「戯曲における観念」（六六号）、佐久間政一「戯曲の非現代的と所謂近代的なる技巧につい

て」、金元佑啓「泰西文学研究上に於ける神話の価値」（七一号）といったところで、教師達の積極的寄稿が目立っている。

『文武会々報』の文学的価値として特筆されるのは六九号（一九一三年六月）に発表された有島武郎の「ワルト・ホイットマンの一断面」である。すでに「二つの道」（『白樺』一九一〇年五月）によって文学者としてスタートしたとき、そこにホイットマンの影響を強く受けたあとが見られるが、「ワルト・ホイットマンの一断面」はとくに自然への憧憬に力を入れて学生にもわかりやすく書かれたものである。この文章の影響力の強さは、のちに小説を書くようになった北大予科の早川三代治が「ワルト・ホイットマンの抱愛」（八二号、一九一七年十二月）を書いているのをはじめ、八九号にはホイットマンの「黄昏」を服部耕平が訳出して載せていることでもわかる。

『文武会々報』の意義は有島武郎を中心にイプセン、ホイットマンの受容と展開がなされたこと、そして、そこで文芸的な気運が芽生えて、一九二一（大正一〇）年以後の文芸活動に刺激を与えたということである。その中でも有島を介してホイットマンの思想にふれたことで文学的に目覚めた早川三代治に焦点をあててみることが必要になる。有島武郎は一九一五（大正四）年に予科教授を辞職して上京し、本格的な文学活動に入ったが、北大でまいた種は有島が去ったあとに少しずつ開花しようとしていた。

三　早川三代治の登場

早川三代治の「ワルト・ホイットマンの抱愛」によれば、ホイットマンとの出会いは中学三年のときだという。一八九五（明治二八）年生まれの早川が中学三年といえば、一九一〇年ごろであるが、この年は前述のように『白

樺』が創刊され、有島の「二つの道」が発表された年でもある。ホイットマンを広く紹介した早い例として、高山樗牛の「ワルト・ホイットマン」（『早稲田学報』一八九八年五月）があり、そこでは「ホイットマンは正に是の時弊の救済者を以て自ら任じたるなり」という視点でとらえられている。以来ホイットマンは一部の人に熱狂的に迎えられ、『白樺』の創刊にも大きく寄与している。早川三代治も『白樺』などによって知っていたのであろう。そして予科に入ってより深く知る機会を得たのである。早川三代治の文章から引用すると次のようである。

予科に短い間教鞭をとつたことのあるバアトレット氏によつて、教師としてではなく、自由な詩人の風姿で、始めてホイットマンの大胆不羈な性格が談じられるのを聞いた覚えがある。

バアトレット氏の父君が大学生の時代のことだと云ふ、ハアバアド大学の式日に、この詩人は飄然とシャツ一枚のまま壇上に登つて、予言者、宣言者、暗示者、又警告者それ自身となつて、新時代の民主自由を咆哮し、参列者が小気味のよい戦慄、激動の十字火に出くわして、沈黙しきつた中を「灰色のなつかしい詩人」は、しつかりとした足どりで、常の如く微笑を慈顔に湛えて風のように去つたと云ふことだ。

このあと早川三代治は日本にホイットマンを紹介した高山樗牛の文章を病床で読んだことを述べ、有島武郎が訳したホイットマンの『草の葉』を『白樺』（一九一三年七月）で読んだ感激を熱っぽく語り、北大予科入学前に、友人から有島武郎の「ワルト・ホイットマンの一断面」を見せてもらったのが機縁で北大に入ったことを語っている。そしてすぐに有島の家を訪れたらしいことは次の文章にあらわれている。

有島さんの瀟洒な書斎で、ある時は溶かしこんだ許りのような青色に輝く秋の空を眺めながら、ある時は冷

たい雨に降りこめられながら、ホイットマンの持つていた強さ、輝かしさに、索き込まれて、をこがましくも、ホイットマンと同じいその至純に、その至高にその至愛に浸つてゐたのを忘れない。しかし、短かつた。僕はホイットマンの詩集と淋しくしかし雄々しく自分の道に第一歩を踏み出す様にさせられた。無情と云ふのか、冷胆と云ふのか、そうではない。ホイットマンと有島さんとは、間違ひなく、本統の自然の道を踏みしめろと教えてくれた人だ。

早川三代治にとって幸運だったのは、バアトレットという、ホイットマンを知っている父を持つ外国人教師と有島武郎が予科にいたことである。かくして早川三代治を中心に文芸活動がさかんになっていったわけであるが、『文武会々報』以外の活動はどうであったかについては、木原直彦の『北海道文学史』に次のように書かれている。

「星羊」創刊の翌四十一年（一九〇八）一月に「梅暦」なる学内同人雑誌がでているようだが、そのつぎの年の一月には本科二年生の三原友良が「鶏鳴」というガリ版刷りの同人雑誌を発行した。そのまた翌四十三年一月には、原田、野村竜吉、丸山猪之吉らが三原を社長におして札幌グラフィック社を結成し、「札幌グラフィック」という二色刷絵入りのこんにゃく版を出した。誌代は十銭であった。これは同人雑誌といえなかったがほどなく解散し、四十四年には原人社が誕生した。原田、谷村愛之助、野村、横山芳介、阿部六一郎、樋口桜五、亀山源一郎らが同人で、月刊誌のような「原人」は半年ほど出して六号で廃刊になった。ここでは、文学だけでなく劇研究会も設けて新劇の研究を進め、ファウストなどの演劇も行っている。四十五年四月には原人社同人の手によって「辛夷」が創刊されたが、これは恵迪寮誌だったようである。また寮の図書部に文芸批評を主とする研究会・凍影社が谷村、板村、横山、足立、岩崎、三井、清水、本橋、樋口、松山らの面々によっ

て結成され、教授の有島や佐久間政一らも指導に加わった。

これを見ると、有島武郎の赴任が刺激になっていたことがわかるが、右に出てきた学生の名前のうち賛歌の作詞者として名前が残っているものに気づく。谷村愛之助「帝都を北に」（一九一〇年）、松山茂助「藻岩の緑」（一九一一年）、横山芳介「都ぞ弥生」（一九一二年）、樋口桜五「我が運命こそ」（一九一四年）などがそれで、これらはいずれも有島在任中の作詞であることがわかる。

四　『とどろき』『氷河』『平原』『歩み』

有島武郎の農科大学予科時代（一九一〇～一五年）の活躍が刺激となって絵画、文芸などの文化活動がさかんになり、その中から早川三代治がでてきたが、次に一九二一（大正一〇）年前後の動向を編年体で追ってみよう。

一九二一年三月、北大に三つの雑誌が創刊された。『とどろき』『平原』『氷河』である。『とどろき』の発行所は「北海道帝国大学予科桜星会学芸部」となっており、この雑誌に作品を発表した人のうち佐藤義臣、東山末三、稲村順三、沢村克人などは当時の北大の文芸関係の中心をなした人たちである。この雑誌の特色は、一九二〇（大正九）年から予科で国文学を講じていた石山徹郎が、武者小路実篤の「新しき村」の共鳴者であったことも関係して、白樺派の理想主義の流れを受けついでいる。創刊号の編集後記で鈴木金作は次のように書いている。

雑草が醜い程はえて居る所を、何事に対しても無知である或る若い農夫が、自分の腕と若い元気を、唯一の

たよりとして、耕し始めた様に、私等はこの本を発行したのです。

傍から見れば随分馬鹿げて居るし、無謀でもありませう。然し、我々は自分の痩せた腕を、羅針盤として、進まなければならないのです。否、進むべきなのです。ですから人から知られない程の苦心をしたのです。

我々は随分苦しみましたが、苦しんだ割合にその生産物は、他の練習した、知識の豊富な農夫の生産物よりは、劣つて居るかもしれません。よく昔から創業の難と申します。我々の苦しんだのは此の為めなのです。でも、此に皆さんの手元に、我々の努力の結晶である此の本を、お贈り出来たことは我々として涙の出る程愉快な事なのです。

この文章には文学作品を「生産物」にたとえるという、芸術を「有用」なものと見る見方が出ているところに特徴があり、明らかに白樺派の影響が認められる。『とどろき』は三号まで発刊され、四号（一九二二年十月）からは『桜星会雑誌』と改名され五一号（一九四〇年十二月）まで続いた。『とどろき』『桜星会雑誌』の収穫は、佐藤義臣、伊藤秀五郎の詩、石山徹郎、青山郊汀の評論、上西清治の創作などが挙げられよう。『氷河』は凍影社という恵迪寮中心のサークルから刊行され、医学一期生の服部耕平が編集し、発行者は鈴木金作。創刊号だけ見ることができたが、古沼艸之助の「私自身の言葉」に『氷河』の姿勢が出ている。

美の存在を信じて疑はない私達の熱情は自己表現の衝動に燃え立つてゐる。

この衝動は、各自に好都合な様式によつて現はれようとする。しかし私達はこれらの発表の機関を有しない。

現今の日本文壇はあまりに中央集権である。

底力のある、図体の大きい北海道には、まだ北国の文芸があらねばならぬ。こゝで氷河はまだ偉大な意味を

持つ。私達はどんなときにも、胡麻かしたり、茶化したりすることは出来ない。私達は生活に敬虔である。

私は氷河の同人になられたことにこらへきれない喜びを持つ。

文字の上の遊戯としてでなく、事実の上に於いて文芸はブルジョワジイの羈絆から脱却してプロレタリアーの文芸であらねばならぬ、と私は考へる。

日本のプロレタリア文学運動の先駆となった『種蒔く人』が秋田県土崎で創刊されたのは一九二一（大正一〇）年二月のことであるが、一カ月おくれの『氷河』に「プロレタリアーの文芸」という表現が見られることは、当時の文学状況を知る上で注目される。しかし、意識はともかく、内容は古めかしいところがあり、創刊号だけで判断できないが執筆メンバーを見ると、その後持続した人は多くない。

『平原』は一九二一（大正一〇）年三月から一九二三年七月まで九号を出した。『とどろき』『氷河』が予科生中心であったのに対し、発行が「北海道帝国大学文芸部」となっている。（創刊号が出たとき校外に出すことを禁じられたので、大学とは全く独立に平原社を創設した）。創刊号の「平原雑話」で菅原道太郎は、

聞いた話だけれども独逸の月沈原は思想の森だと云ふ。私はどんな処か知らない。けれども今こうしてここに立つて見まはす時札幌ほど美しい自然はない様に思ふ。自然がどんなに大きい影を人心に与へるかを思ふ時私は必ずここからせめて日本だけでも照す思索の光が出なければ嘘の様な気がする。

これ丈けの思が私を駆つて平原の創刊を思い立たせた。何等顧慮する事なしに前主任稲川君の後を引き受けさせた。そして今日まで漕ぎつけてきた。人間のやる事だ、こう言つて済まされたいことが其処にあつたかもしれない。けれども私はそれ等を憂慮するに代へがたい微かな喜びを生ずる。そして創立にお力添え下さつた

稲川晃兄及び七名の創立諸君に深く感謝する。

猶創刊に際しわざわざ御寄稿下さつた東京の宮原晃一郎氏及先輩早川三代治氏及びに氏を通じて高田治作、出口豊雄、羽田鋭一郎の諸氏に厚く御礼申上げます。

と書いている。準備期間があり、執筆者を広く求めて質の向上をはかろうとしたようだ。菅原道太郎、沢村克人（農予科三年）が中心で、同人には農学部教授の新島善直、のち助教授早川三代治、予科教授の石山徹郎なども加わった。『平原』は『北大文芸』の創刊号も兼ねているので、次に創刊号の目次を掲げておく。

地下室（アンドレエフ）	宮原晃一郎訳
百合を毟る（創作）	沢村克人
夫婦（戯曲）	中村幸次
発狂せる母（創作）	稲村順三
鈴虫（同）	羽田圭四郎
鐘がなるまで（同）	菅原道太郎
恩愛に抱かれて悩む（同）	玉貫光一
冬の頌（同）	野上和吉
草と土（同）	佐藤義臣
新生（短歌）	南須原和彦
夢現（同）	有賀樸木

『平原』で注目されるのは沢村克人の義兄でフランス文学者として著名な内藤濯が二度ほど執筆していることや、チェホフ、シュニッツレル、ストリンドベルク、トーマス・ハーディなどの翻訳が毎号載っていることである。第九号を見ると、図書館の司書をしていた玉貫光一が「処女の死から」という文章の中で、倉田百三の戯曲「処女の死」をとりあげ、「すべての思想はその時代の経済状態によつて規定せられると言ふマルクスの主説や、かかる観念をマルクスに植付けたと云はれるフォイエルバッハの哲学に興味を持つ私の主観はこの偉大なるべき作品をして資本家文学者の知識的手淫と思はしめ何等の感動も与へてくれなかつた」と批判している。これを読むとプロレタリア文学の潮流が北海道に波及しつつあった時代の影響が認められる。

『平原』については創刊の中心になった菅原道太郎の「平原社時代の思い出」（『北海道文学』二二号、一九六六年四月。同誌二六号、一九六七年八月）があり、また同人の一人で医科二期生の佐藤義臣が「平原社の人々」（『北海道文学』二六号）を書いて当時を回想している。

一九二一年五月には『歩み』が創刊されている。南須原彦一、政雄の兄弟が中心で、学内ばかりでなく一般の文学愛好者も参加してすすめられた。終刊は不詳だが、一九二五年ぐらいまでつづいたようである。（一九二三年四月の一〇号まで確認）この南須原兄弟の存在は大きく、外山卯三郎は「『北大文芸』の文化的意義」（『北大文芸』四〇号、一九四〇年二月）の中で「当時人はこれを『南須原ゴンクール』と名づけてゐた」と回想している。一九二一（大正一〇）年七月、南須原彦一の歌集『力の断片』（発行者南須原政雄、印刷者有賀晧）が刊行されている。彦一は当時農芸化学科二年生であったが、諸誌に発表した短歌五一五首と詩一〇篇を発表している。序文は印刷者の有賀晧（筆名は櫟木）、跋文は弟の政雄の手になる。政雄の詩も五篇ほど載っていて、政雄は跋文で、

「人生は一つの鏡である。その内に自己を最大の姿に見いだす努力が生命の目的だ」といふニイチェの言葉や、「世の中で一番つまらないものは私です」と云つたホイットマンの言葉に深くも動かされて、私達兄弟は大胆にも第一の白い花「力の断片」を咲かせました。（中略）

どこまでも正しい生一本な石狩の花として、ぐんぐん成長していく二つの柔い心を、いつまでも懐かしんで下さい。

エドモン・ゴンクールだといふ兄キと、ジュール・ド・ゴンクール張りの私とが、日一日と北海の自然に育ち行く姿を親しい心で眺めて下さい。

と書き記している。いかにも理想主義の流れをくむ雰囲気が出ている文章である。

五　『北大文芸』

『北大文芸』（一九二一年六月～四一年一月、四一号まで）は息の長い雑誌として注目されるが、創刊号がない事情について、菅原道太郎は「平原社時代の思い出」（『北海道文学』二六号）で、

原稿は、はじめ「北大文芸」の名目で、学内一般から公募したので、既にかなりのものが集められていた。しかし「平原」は、同人雑誌として出発する以上、その内容は、あくまでも同人主体とすべきものでなければならない。そこで、集まった原稿をふるい分けして、同人及び準同人と目すべき連中のものだけで創刊号を埋

めることに踏み切ったのである。そして、学内から公募した原稿は、「北大文芸」の方にまわすこととしたのであるが、ここに一つの問題が起きた。それは、（略）経費の関係から、「平原」の創刊号は、「北大文芸」の内容をそのまま使い、表紙だけ刷りかえて、印刷代を浮かそうという魂胆であった。したがって、「北大文芸」第一号の内容は、「平原」創刊号の内容そのままとなり、一般公募の原稿がしめ出される結果となってしまった。この間の経緯は、いつの間にか学生間の風評として流れたらしく、果然「北大文芸」のゲラ刷りが出来た頃、北大文芸愛好同志会代表という資格で、土木専門部委員の渡辺隆志君が顔を真赤にして、大学正門前の街頭で、私に詰問するという一幕があった。

と述べている。結局、『北大文芸』は公募原稿を優先的に載せ、北大学生全体の公的機関とし、『平原』とは区別するということでけりがついたという。しかし実際の編集は七号ぐらいまで稲村順三、沢村克人が交替でやり、この二人は『平原』の有力同人であったからはじめの頃は『平原』と『北大文芸』の執筆者は重なっている。

『北大文芸』に特色がでてくるのは一九二二（大正一一）年に北大予科に入学した外山卯三郎が参加しはじめた頃からである。一九二四年の六号に評論、七号に「『R・U・R』の上演と舞台装置について」という演劇評論、八号に「詩と形態」という詩論、九号（一九二六年一月）に評論「絵画の色彩について」と舞踊詩「瀕死の魂」などを発表して多彩な活躍を見せているが、「瀕死の魂」という詩は次のような奇抜なもので、当時のダダイズムの影響が大きい。

「瀕死の魂」
花、リボン—。

下駄、紋付、元結
23　688　香水
—学位があるのですよ—
ORR　海老

外山卯三郎は一九〇三（明治三六）年和歌山生まれ、一九二二（大正一一）年、北大予科入学。一九二五（大正一四）年六月『さとぽろ』を創刊主宰。一九二六（大正一五）年、北大予科から京大哲学科に進み、一九二八（昭和三）年、美学美術史専攻を卒業。『詩と詩論』同人、『新洋画研究』『芸術学研究』主宰。主要著書に『詩の形態学的研究』（一九二六年）、『詩学概論』（一九二九年）、『純粋詩歌論』（一九三二年）、『日本洋画の新世紀』（一九三三年）などがある。

一一号（一九二七年六月）以後には早川三代治の活躍がめだっている。早川三代治は一九二一年に農学部を卒業してドイツに留学し、数理学派の経済学を修め、帰国後北大で農業経済を講じた。『北大文芸』における早川三代治の著作一覧を掲げる（カッコ内は号数）。

早川三代治の著作年表
蝸牛他一篇（創作）　（一一）
青鷺（同）　（一二）
命、お初を追ふもの（同）　（一三）
阿呆（同）　（一四）

出家（有島武郎追悼記）（一四）
ヨーグルト（戯曲）（一五）
白い鳥（同）（一六）
死者の弥撒（創作）（一七）
白い塔（戯曲）（一八）
土地・十六場（同）（一九）
おそれ（同）（二〇）
レアとシェリイ（同）（二一）
続レアとシェリイ（同）（二二）
巌と砂（同）（二三）
口上・五場（戯曲）（二四）
愛する（同）（二五）
鶴の棲息地（創作）（二七～三〇、三三）
山上の人（同）（四〇）
ある余生（同）（四一）

そのほか目立つ活躍は詩の伊藤俊夫（一八号から四一号まで二〇回）、伊藤秀五郎（六号から九号まで六回）、河邨文一郎（三三号から四一号まで五回）たちで、これらの人は詩人として名をなした人たちである。また評論にも見るべきものがあり、一四号の「有島武郎追悼記念号」（一九二九年七月）には、森本厚吉「有島武郎を憶ふ」、宇

野親美「芸術家の有島さん」のほか、佐藤惣之助「琉球の歌謡を中心に」が載っている。西村美宣「中世に於ける源氏物語理会の変遷」、伊藤俊夫「ファウストに於けるヘーレナの問題」、犬飼哲夫「阿寒のアイヌ」（二九号）、東孝「農民文学とは何ぞや」、池田善長「農民文学再考」（三一号）、上西清治「ユマニスムと鴎外」、河邨文一郎「ボオドレエル論綱」（三五号）、宇野親美「北大文芸四十号記念に際して」、外山卯三郎「『北大文芸』の文化的意義」（四〇号）、西村憲治「『旅愁』の投げかけるもの」、谷川徹三「文化形態学」〈講演筆記〉（四一号）などは、今日も有効な評論として貴重である。

記録として価値があるのは三七号（一九三八年八月）に、一九三八（昭和一三）年六月十八日、新聞部主催で横光利一、川端康成、式場隆三郎を呼んで講演会があり、その後文芸部主催の座談会が豊平館で開かれたことの報告がある。このときの演題は『北海道帝国大学新聞』（一九三八年六月二十八日）によると、横光利一「ヨーロッパと日本」、川端康成「北条民雄」、式場隆三郎「精神病」というものであった。座談会の方では横光利一が話題の中心になったようで、報告者（多分、編集発行者の河邨文一郎）は次のように書いている。

> 横光氏が内面論理と外面論理を説き、外面論理、即ち科学を判断したわけであるが、内面論理を僕達の行動基準と認識した根拠は、斯うした時間のない座談会で有勝なように明瞭でなかった。それはさておき横光氏の感想に、大声で話すと頭が冴えてくるという言葉があったが、それを思い出しつつ横光氏の楽しい背水の陣をしいたような話をきいていると、一種の深い味わいがあったのである。

よくわからないがおもしろかったという感想である。横光利一は当時、一九三六（昭和一一）年の半年にわたるヨーロッパ旅行から帰って、一九三七年には「旅愁」を新聞小説として発表し、次の続編にかかる一年半あまりの

模索の時期であり、西洋と東洋、科学と自然に思いをはせていた時期であった。

戦前の北大における文芸活動としてはこのほかに、予科文芸部から出ていた『楡影』（北大附属図書館には一九二九年一八号から、一九三三年三〇号まである）があり、その中では、ゲーテ、ヘーゲル、ヘルデルリーンなどドイツロマン主義にふれた評論を書いた青山郊汀、平松勤の短歌、上西清治の創作などがめだつ。

大正末期から昭和一六年ぐらいまでの北大における文芸活動を中心に概観して感ずることは、有島武郎―早川三代治という白樺派の理想主義が中心となっていること、そして時代の波としての社会主義運動の影響がそれに重なっているということである。もう一方の流れは外山卯三郎の登場によってモダニズムが流入され、詩の方面に活力を与えたということもできる。北海道の自然を賛美する風景詩と外山卯三郎のもちこんだモダニズムがもっと解け合えば良かったと思われる印象もある。

六　戦後

一九四六（昭和二一）年六月、北大双眸会が『双眸』を創刊した。初代編集人の井上泰男と二代目の平城昭介は一九四七年四月に発足した北大法文学部で西洋史学を専攻した第一期生である。『双眸』は一九四七年四月に四号を出したが、匠秀夫の「世界史の動向と哲学の反省」（二号）、平城昭介の「死のかげの世界―〝風たちぬ〟と〝菜穂子〟」（四号）などの評論が発表された。

『北大季刊』が創刊されたのは一九五一年十月である。文芸部が解散した一九四一年から一〇年後である。創刊号を見ると、編集者は風巻景次郎、発行者は岡不二太郎となっている。風巻景次郎は北大法文学部の国文科創設に

招かれて偉大な足跡を残した国文学会の異彩である。岡不二太郎は「自然科学概論」を講じた人である。創刊号の目次を列挙すると次のようである。

フランソワ・ヴィヨン　（窪田　薫）
放浪する文学の鬼　（猪俣　庄八）
子羊圏の周辺　（風巻景次郎）
ヘルマン・ヘッセの最近の手紙から（井出　貢夫）
（創作）
月夜の電柱硝子　井上貞行
三木家の人々　和田謹吾
ホロロ原野のカイン　早川三代治

詩の欄には河邨文一郎、伊藤秀五郎、伊藤俊夫、高木研一などかつての文芸部のメンバーが寄稿している。教官が前面に出ているが、号を追うに従って学生の寄稿も多くなっている。次に三一号終刊（一九六九年七月）までの『北大季刊』を北方資料室にある分について（二一号から二五号まで欠号）、創作欄を中心に主な作品をひろってみよう。

【二号（一九五二年五月）】

（創作）津金充「十字街」、可知春於「夜の女三題」、本山節弥「共喰い」、山崎佶「死人の部屋」、服部良一「大いなる舞曲」、（詩）柏倉俊三、阿部保、三浦栄、千葉宣一、木村咲也。本山節弥は当時工学部の学生で、今や演劇界にあって全国的に知られたる存在。柏倉俊三は英文科でシェークスピアを講じていた人。阿部保はポウの翻訳、

詩人で知られ教養で外国文学を担当していた。三浦栄、千葉宣一は国文科の学生で、三浦は『赤い雪』という詩集を残して自殺した。

【三号（一九五二年十二月）】

（評論）藤田清次「宇野浩二論」。（創作）可知春於「ダム」、津田一夫「春日抄」、井上貞行「花のおどり」。（詩）細谷勇輔、伊藤俊夫、阿部保、千葉宣一、佐々木宏、窪田薫、後藤辰夫。藤田清次は英文科の教官、後藤辰夫はフランス語を教えていた。

【四号（一九五三年六月）】（創作）三木愿「死者と生者」、服部良一「深夜の葬祭」、可知春於「『白い手』の夫妻」。三木愿は和田謹吾のペンネーム。

【六号（一九五四年七月）】（評論）匠秀夫「日本近代絵画の性格」。（短歌）菱川善夫「沈澱物」。（創作）市江弥門「散る花の下で」。匠は西洋史専攻の学生でのち美術評論家。『三岸好太郎』『中原悌二郎』などの著作がある。菱川は短歌評論家として『北の会』を主宰し、著書に『敗北の抒情』『中条ふみ子』『現代短歌美と思想』などがある。

【七号（一九五五年一月）】（創作）所雅彦「終バス」、谷藤浩「地の人」、若林玲子「湖」、八代葵「遁走曲」、早川三代治「穴」。

【八号（一九五五年六月）】（短歌）加藤多一「不安なる空」。（創作）谷藤浩「町工場主」、岩野敏彦「ピエロ」、小野健一「翳り」、赤石義博「流転」。加藤多一は現在童話作家として活躍している人で『ふぶきだ走れ』が代表作。

【九号（一九五五年十二月）】（創作）成河智明「彷徨」、堂本茂「十字架の見える路地」、牧野法郎「霙」、井上貞行「春の風」、足立俊一郎「八人のユダ」。（詩）千葉宣一。（短歌）加藤多一。堂本茂は医学生でのち静内町で開業しながら『日高ペン』『静内文芸』を主宰した。

【一二号（一九五七年六月）】（創作）保坂直太郎「ぼくの英文」、所雅彦「汽車の煙の見える丘」、石川弘明「殺人者の自殺〈戯曲〉」、塩見俊一「遠い夏」。

【一三号（一九五七年十二月）】（創作）藤本道子「網走にて」、山村赫「不死鳥と葡萄の木」、保坂直太郎「チタニューム」、田村武雄「人形の夢」、町田荘一郎「人喰い熊」。

【一四号（一九五八年六月）】（創作）古屋統「野島多平」。

【一五号（一九五八年十二月）】（創作）田村武雄「夏のあと」。

【一六号（一九五九年六月）】（創作）やまのうちとしお「スフィンクス」、田村武雄「教授令嬢」。

【一七号（一九五九年十二月）】（創作）大平整爾「邯鄲の夢」、出口裕弘「八月堂始末記」。出口はフランス語を教えていた人。『京子変幻』という創作集で知られ、モーリス・ブランショの『文学空間』の翻訳も有名。

【一八号（一九六〇年六月）】（創作）野坂幸弘「序の歌」、田村武雄「カミレの日」。野坂は国文科の学生で、のちに文芸部創設の中心となった。

【一九号（一九六〇年十二月）】（創作）大平整爾「縮尺の世界」、佐藤尚爾「暮色挿話」、渡辺淳一「アンドウ・トロワ」、古屋統「雪霏々」、出口圭造「消えた女」、桝田知身「夏の日の出来事」。渡辺淳一、古屋統はのちに『くりま』同人。渡辺は直木賞を受賞した。

【二〇号（一九六一年六月）】（創作）大平整爾「サイコ」、桝田知身「乱反射」。

【二七号（一九六四年十二月）】（創作）萩山深良「ひとめぐり」、寺久保友哉「門外」。（詩）石綿静子「ふるさと」。寺久保は芥川賞候補に何度もなった。石綿は万葉集を専攻した国文科学生。

全体に医学部、文学部からの寄稿が多いことに気がつくが、国文学の和田謹吾が編集委員であった関係で国文科学生の寄稿が多い。創作では医学部が多いのが特徴であった。『北大季刊』は大学から資金が出ていたこともあっ

て活版の総合誌として役割を果たした。以後は同人誌時代になるが、そんな中で文芸部が再建された。

七　『序説』

一九六一（昭和三六）年二月、『序説』創刊号が出た。前年の六〇年安保闘争の挫折感がその気運となっている。一九四一年に文芸部が廃部になってから二〇年後に文芸部創設がなされたわけであるが、その中心になったのは野坂幸弘で国文科の四年であった。部創設の動きは一九六〇年九月頃から始まっており、毎週のように読書会がもたれていた。創刊号の「後記」には次のような短い文章が載っている。

> 九月から「文芸部」をつくるために、いろいろ準備をすすめてきた。「例会」「学習会」（これまでに「異邦人」「ペスト」「文学とは何か」、各月の合評）などを試みた。
> また、十月の大学祭では、シンポジウム「戦後世代の文学」を開催し、一応の成果をおさめたと思っている。未だ部としての体裁は充分ではないが、一つの発表の場として『序説』を発行する。批判、教示をお願いする。（後略）

このときのシンポジウムは学外の文学愛好者を招いて盛会であった。シンポジウムの成功が雑誌発行の気運をもりあげたともいえよう。創刊号には木村順治の「羽毛記」、実吉峯郎「ふじばかま」、仙道富士郎の「囲いのなかで」などの創作、亀井秀雄「本格小説論覚え書き」、野坂幸弘の「青春の書」、多海本泰男の「立原道造論」などの評論

のほか、田村一郎、榊原勝昭、中原淳一らが詩を発表している。ガリ版刷り七四頁であった。創刊号同人名は次の通り。

（学生会員）伊藤豪、佐藤啓爾、仙道富士郎、前田喜美子、今井泰子、実吉峯郎、津坂和子、野坂幸弘、神谷忠孝、大川清司、木村順治、林茂保、黒田征、榊原勝昭。

（卒業生会員）田村一郎、亀井秀雄、多海本泰男。

『序説』は二号で終刊したが、二号（一九六二年七月）は評論特集で、亀井秀雄「平野謙の昭和十年代」、野坂幸弘「開高健論」、田村一郎「安部公房論」が載っている。原稿段階での同人同士の批評は厳しく、なかなか載せてもらえなかった。編集責任者の高すぎる要求水準もあって、二号でつぶれてしまったのは残念であった。

『序説』終刊から三年後に文学部総合雑誌として『胎動』（一九六五年二月）が創刊されている。資料室にある二号から四号までの文芸欄の目次を書いておく。

二号（一九六六年二月）（詩）笠井嗣夫、（時評）工藤正広。

三号（一九六七年二月）（詩）工藤正広、高橋あり子。（評論）安藤和幸「空白の影像」。

四号（一九六八年六月）（詩）西冬子、坂本敏夫。（評論）大堀精一「吉本隆明論序説」。

このほかに北大雑誌刊行会の『雄叫び』が一号（一九六一年十二月）から一〇号までを出している。

八　『春楡』

戦後の北大文芸部が『序説』を二号まで出して一九六二年には活動を終えたあと一五年目に北大文芸部が復活し

た。『春楡』創刊号（一九七七年七月）から七号（一九八一年一月）までの顧問は神谷忠孝で、神谷が一年間インドネシア大学客員教授として日本を離れたため八・九号の顧問はフランス語の菊池昌実がつとめた。『春楡』は医学部学生の大瀧和男、大森和広らが中心となって創刊され、創作では藤江郁夫（大瀧）、北原行人（大森）、青木美輝、村岡英治、詩では佐藤峰映、牧野森太郎、石本裕之などが活躍した。神谷は三号から七号まで「北大における文芸活動の史的変遷」を連載した。『春楡』はその後『ぎよ』と改題されて現在も継続している。

（名誉教授）